433
講談社現代新書

原稿の書き方

日本語はゆれている。「わが地所に不可能の文字はない」「献上の美徳あるのみ」と書く学生がいる一方では、「耳ざわりがよい」「乱ペン乱文にて失礼」という表現がまかり通る。現代は、だれもが原稿を書く時代である。しかも原稿が、メモや日記とちがって、他人に見せ、印刷されるものである以上、そこにはルールがあり、よりよい伝達のための工夫がなければならない。本書は、原稿用紙の正しい使い方から文章表現の技術まで、長年の経験に基づくノウハウを公開し、巻末には、現代日本語の標準表記と校正記号一覧を配した現代人のための文章教室。

尾川正二

原稿の書き方
昭和五一年三月二〇日第一刷発行　昭和五二年四月一一日第六刷発行
著者——尾川正二
© Masatsugu Ogawa 1976 Printed in Japan
発行者——野間省一　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二　電話〇三—九四五—一一一一　振替東京八—三九三〇
装幀者——杉浦康平＋海保透
印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
●—定価はカバーに表示してあります
落丁本・乱丁本はおとりかえします（学1）

詩の書き方

尾川正二

講談社現代新書

はじめに

人間の心の奥底は、際限もなく深い。それは、本人自身にも自覚されないものであろう。たとえば、限界状況に置かれたとき、意識にものぼらなかった「自由」な思考に驚くことがある。頭の天辺で考えていたことと、からだ全体の思考とは違うということに気づく。書くという状況をつくることによって、その深層にひそむものを吸いあげることもありうる。

個人をとりまく世界もまた、際限もなく広い。タテの生命意識の深さ、ヨコの社会意識の広さ、その交錯するところに、個人の位置がある。その世界と個人とを媒介するものが、ことばである。無限ともいうべきからみあいのなかで、人間や世界に対する解釈・評価は、ことばをとおしてなされる。

タテの世界であれ、ヨコの世界であれ、深く掘りおこしてゆけば、ことばを失う。沈黙するほかはなくなる。その本源の沈黙を突き破ることばが、ほんとうのことばであろう。われわれの前に、棒杭のように突き刺さり、容易にすりぬけて通ることのできないことばは、その沈黙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の深みから発せられたものである。

また一面、読もうとすれば読める、書こうとすれば書けるのも、ことばである。日常の世界でのことばは、通じ合えることを自明のこととしている。話すこと、読むこと、書くことに、われわれはそれほど不自由を感じていない。おしゃべりは、空間から空間へと、とめどもなく湧きおこり、消えていく。文章にしても、だれにでも書けるし、また、書いてもいる。一文四百字を越える長文も書けるし、二十字前後の短文を連ねることもできる。気どった文も書けるであろうし、淡白な文も書けるであろう。「危険な自由」が、散文にはある。その自由を意識すると書けなくなる。

たとえば、五七五という枠が、表現をおちつかせることもある。「よその子も　わが子と思い　愛の手を」という「型」に寄りかかった標語の類がそれである。構造のうえから、ある安定したものを感じさせもする。むしろ、形式、リズムのほうから働きかけてきたものといえよう。型のない散文となれば、自由であるだけに危うさがつきまとう。「散文的」が、多く否定的な意味に使われるのも、そのためである。

個々の「語句」が集まって「文」を構成する。「文」が集まり「段落」となり、段落が集まって「文章」となる。語句——文——段落——文章、それぞれ各項にわたって考えなければならぬものは多い。さらに、認識・判断という主体の問題がからまってくる。そういう複雑な機

構のうえに文章が構成されるとすれば、いかにも「危険な自由」というほかはない。世阿弥が、「上手にもわろき所あり。下手にも、よき所必ずあるものなり」（『風姿花伝』）と言っているのは、文章にもあてはまる。そこに、文章のおもしろさがあり、むずかしさがある。

したがって、文章教室では、〈主題をはっきりさせる。文章の構成――主題の展開のため、たとえば序論・本論・結論という構成を想定する。段落の設定。文の構成――主語・述語の照応など、文法的に整った文とする。語句を適切に使う〉という「公式」に集中せざるをえない。さらには、文字表記・句読法・原稿用紙の書き方という細目に及ぶ。だがしかし、公式をわきまえることと、実際に書くこととは、必ずしも並行するものではない。

もっとも自由にものを考える時代だといわれる高校三年生に、「よい文章の条件」を問うてみたことがある。約三百名に、どのような文章を望んでいるかをたずねたわけである。第一に挙げられたのは、「読みやすい文章」（百十九）で、約三分の一が集中していることになる。「読みやすい」とは、「わかりやすい」「理解しやすい」「平易」「やさしい」「読んですらすらわかる」ことを意味している。

以下、(2)「短文であること」（九十二）、(3)「簡潔であること」（八十二）、(4)「主題がはっきりしていること」（七十九）、(5)「論理的で、明確であること」（七十六）、(6)「むずかしい漢字を使わぬこと」（六十六）、(7)「文章の展開、構成がよいこと」（六十五）、(8)「表現に現実感があるこ

と」(四十八)、(9)「文法的に整った文」(四十六)、(10)「文にリズムがあること」(四十四)、以上が、上位十位までの項目である。「むだな修飾、大げさな表現技巧がないこと」(三十八)、「重複がないこと」(二十)、は「簡潔さ」のなかに含まれるであろう。「簡潔さ」への志向は大きい。それも、「読みやすい文章」の条件とみられよう。

六位の「むずかしい漢字を使わぬこと」は、当用漢字で育ってきたものの声であろう。作文指導書にも、「当用漢字の範囲で書くこと」と規定してあるものがみられる。「読みやすい文章」には、「読めない漢字を使うな」という訴えが含まれている。「ことさら学があるように、むずかしい漢字を使っているのは、不愉快だ」とか、「漢字が多いと、読む意欲がなくなる」とか、「漢字の少ない文章が、よい文章である」とか言っている。当用漢字以外は、漢字ではないという意識さえ感じられる。「何のための当用漢字の制定であるのか」と開き直る。わけのわからぬ漢字は使うな、と高校三年生は叫んでいるようである。

外来語のカタカナの氾濫を非難しているのは、二、三にとどまっていた。読めない漢字へのいらだちが際立(きわだ)ってみえた。漢字に対する意識が、大きく変わってきているのである。ことさらに、むずかしい漢字に挑んでゆくという好奇心も薄れている。明治以降の作品も、当用漢字で書き直さなければ、読めないし、読まないということになろう。

「よい文章」の内容としては、「つぎつぎと、自然に先が読みたくなるようなもの」「興味をそ

そるもの」「楽しませるもの」「おもしろいもの」(三十五)、「共鳴しうるもの」「共感をよびおこすもの」「感動させられるもの」(二十九)、「読者をひきつけるもの」「何かを訴えかけてくるもの」(二十八)、「魅力あるもの」「新鮮さ」(十四)、を合計すると百六となる。つまり、「読ませる」ものを期待しているわけである。「考えさせるもの」(十五)、「心に余韻を残すもの」(十四)、を加えると、文章表現以前の題材の問題となろう。要するに、かなの多い、おもしろい文章を、「よい文章」とみるのが、大勢だといえよう。

もちろん、例外はある。「狂気と紙一重で書かれた危険な文章」「魂が吹き飛ぶ寸前の状態で書かれた文章」「日常倫理を否定した文章」「超現実主義的な文章」という「文学」への傾斜をあからさまにみせているものがあった。個人や個人の属する現実を超えた価値への志向も、当然ありうるころである。当用漢字を否定して、愚民政策と批判し、漢字を自由に使うべきだ、という指摘もあった。文章の基準が、まったく違っているものも、いく人かはいる。

道元は、「ある時は意到りて句到らず、ある時は句到りて意到らず。ある時は意句両つ俱に到る、ある時は意句俱に到らず」と言っている。文章を書くものは、つねに、その危険にさらされている。ことばは、けっして「現実」と符合することはない。個人の意識という鏡をとおして、概念化されるほかはないものだからである。ことば、概念によって手に入れるものは、「事実」そのものではありえない。何もかも包みこみ、しかも、ぬけ落ちてゆくものをどうす

ることもできない。そこに、技巧が必要になってくる。

文章は技巧である。「大洋の水を傾けても、この血で染まった手を、洗い清めることはできない」（『マクベス』）という誇張法によって、殺人の深刻さを納得することができる。平家討伐の陰謀を密告した男を、「大野に火をはなつたる心地して、人もおはぬにとり袴（はかま）して」（『平家物語』）と書くことによって、裏切者の心境が伝えられる。比喩の効果である。

自分の病を死病と察した鷗外は、医者の検査をかたくなに拒んだ。泣いて頼む妻のこころざしを容れ、尿の検査を賀古鶴所（かこつるど）に依頼したとき、「僕ノ尿即チ妻ノ涙ニ候」と書いた。説明のない隠喩が、読むものの心を打つ。

ことばの限界を知りながらも、明晰に、正確に、意図を伝えようとすれば、技巧的にならざるをえない。「みたまま、考えたとおりに書く」ことは、そもそもできないことなのである。それに近い文章は、おそらく読むにたえないものとなることであろう。

数多くの学生諸君の作品をもとにして、文章表現の要点を抽き出してみると、つぎのようになる。

(1) 書かれたものが、言うに価するものであること、それが文章の大眼目である。その他の、文章の条件がいかに整っていても、「言うに価する」という一点を欠くならば、よい文章とはなりえない。

(2) 「言うに価すること」について、とかく陥りやすい判断の型がある。一つは、特殊な対象に心奪われて、そこから普遍的なものに及んでしまうこと、一つは、普遍的なもの――ある直観からつかみとられたもので、すべてを類推するという短絡的な思考法である。

(3) 一つのテーマ(主題)に対して、二百字前後の段落を設定すること。文と文章との中間形としての段落である。さらに、各段落に小主題を入れ、主張を明らかにすること。

(4) 文の構成を整えること。主――述、修飾――被修飾などの関係、ねじれ文、中止法に留意しながら、一文の長さを五十字をめやすにする。

(5) 一つ一つの語句を適切に使うこと。いわば、建築の土台となるべき素材にあたる。意味の誤用、文法上の誤りが、建築を傾かせてしまう。誤字・慣用句・流行語などに潔癖であること。

(6) 簡潔な表現をめざすこと。長文、重複のくどさは、読者を飽かせる。文章のリズムは、説得力を加える。

(7) 明晰、わかりやすさ、論理的な展開をめざすこと。感情を抑制することによって、文章の気品、端正さを添える。いきりたって、なまの感情をぶちまけると、ひとりよがりになり、文章も汚れる。

(8) 固有のものをもつこと。文章の流れに従っていた読者が、一瞬立ち止まるのは、そこで

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ある。立ち止まって味わう、それが文章を読む楽しみである。

完結することはあっても、完成することがないのが、文章の道であろう。多く読み、ことばで考える習慣をもつことによって、それぞれに与えられている書く能力を開発してゆくこと、それは、自分自身に対する責任でもあろう。

以下、まず原稿用紙の使い方からはじめて、簡潔でしかも読む者の心に響く文章の書き方について、考えてみたい。

原稿の書き方／目次

目次

はじめに……3

1——形式上の基礎……15

1—原稿用紙の使い方　16

2—符号の機能　21

3—国語表記の基準　36

4—原稿の作成　41

2——意識と文章……45

1—青年層の文章　46

2—意識的になること　52

3—ことばの関係構造　62

3——ことばと文章……67

1—「悪文」を書かないために　68
2—書くということ　79
3—ことばの働き　85
4—事実と表現　90
5—写生文　95
4——文章の解剖……101
1—パラグラフ思考　102
2—切れない句点　107
3—中止法の危うさ　116
4—同音異義語　127
5—決まり文句　132
6—明晰と誇張　141
7—人称のこと　150
5——「読みやすさ」の探求……155

1—表現の「姿」 156
2—表現の不備 161
6——作品抄……179
1—「雪は白い」か 180
2—内面をみつめる 188
3—イメージを追う 191
4—「人間」をみる 195
5—文化を問う 197
あとがき……201
巻末資料＝現代かなづかい／新旧かなづかい対照表／同音の漢字による書きかえ／校正記号

1——形式上の基礎

（一）

蓮華寺では下宿を兼ねた。瀬川丑松が老ゐ特宿を思ひ立つて、借りることはした
へや
部屋といふのは、其義表つゞきのある二階の角のところ。[redacted]寺は信州下水
内郡飯山町二十何ヶ寺の一つ、真宗に附属する古刹で、丁度其二階の窓から倚凭つて眺めると、銀杏の大木を経●て飯山の町の一部分も見える。さすが信州第一の佛教の地、古代を眼前に見るやうな小都会、寺異な北国風の屋造、板葺の屋根、まことに冬期の霜除として使用する特別の軒庇から、ところ〴〵に高く頭れた寺院

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com